

子どもの加減行為についての一考察

大澤 洋美・安見 克夫・福山 多江子・永井 優美

I はじめに

人は物事をどのように学んでいくのだろうか。いわゆる明示知 (explicit knowledge) というものがある。これは認識している事柄を言葉で説明できるもの、すなわち知識にあたる。一方、言葉にすることはできないが、「知っている」ことがある。これは「できること」(技能) であるともいえよう。身体知の視点から考えると、例えばピアノの弾き方や自転車の乗り方は言葉に置き換えられないが確かに知っており、できることである。ここに身体知の暗黙性が認められる。マイケル・ポランニーは「私たちは言語にできるより多くのことを知ることができる」と述べ、それを暗黙知 (tacit knowledge) としている¹。ポランニーによれば、暗黙知とは、「身体と事物との衝突から、その衝突の意味を包括＝理解することによって、周囲の世界を解釈する」ものであるという。ポランニーはこの「包括」を知的かつ実践的なものとし、すべての認識は包括の行為から成り立っている、もしくはそれに根ざしているから見なしている。これらのことから、人は身体的行為を経てそれが身体知となる中で周囲の物事やそのつながりを直観していく存在であると考えられよう。また、ポランニーは「人間の精神を誕生させる教育の過程こそ、そうした包括力 (暗黙的包括：引用者注) が行使される主たる場所」と述べ、子どもについて次のように記している。

子供の持つ生得的な知的回路のレパートリーは乏しいものだが、やがて子供は自身に備わった包括力を用いて、経験をなお一層固定した関係へと束ねていき、そのレパートリーを急速に増やしていく。ピアジェは、固定した論理的手続きのルールをますます発達させることによって、子供の推理力がいかに向上するかを述べている。この発達は言語の内面化によってさらに加速され、ついには子供に大人の精神が宿ることになる。

子どもは身体を駆使して物事を包括的に認識していくが、その過程の中で言語が多大な役割を果たしているのである。これまでの研究では、身体知獲得における言語の重要性が看過されてきた。それはそのことを検証する手法が確立していなかったからであろう。本研究においては、子どもの「加減」行為に着目することで、身体知が言語を介して、または言語の内面化によって高められていくことを指摘したい。それは幼児期の総体的な学びの性質をも示すものとなるであろう。

本研究で用いた「加減」という新しい用語は、「調整」や「調節」などに言い換えられようが、上記のような暗黙知との関連から、物事やそのつながりについて包括的に身体を通して認識していくことを意味している。以下、子どもの「加減」行為を取り上げ、事例に即して検討していく。

II 研究の方法

日々個々に出会う遊びの中で、その子の行為に着目し、どのようにして「加減」を経験し、学び取っているのかを目視と写真及びビデオで記録し、行為（行動的・情動的・言語的）の一部である、その子がモノを扱う時の身体的加減を分析することで自己性がどのように形成していくのかを明らかにする。

1. 普段の遊びでの身のこなしや、物を扱う時の情動について分析

・期 間 2016年7月—2017年2月

・対 象 幼稚園3園幼保園1園 1歳児～5歳児

・方 法 写真・ビデオ撮影及び手記記録

◆行為「加減」の場面を目視、写真、ビデオで記録し、判別条件を基準に「加減」行為を保育経験者20年以上のカンファレンスによって分析

2. 子ども自身が、行為として動く「加減」が言葉の生成に、どのように影響しているかを明らかにする

・期間と方法

2016年7月—2017年2月の手記記録プロトコルを元に分析してきたが、加減と副詞との関係からの文脈の分析を行った結果、副詞を抽出し、その副詞との関係性は、分析過程において、極めて困難を要することが分かった。

そこで、2016年7月—2017年2月の記録の一部と【野間教育研究所幼児部会紀要「秋田・増田・中坪・砂上・箕輪・安見『葛藤場面からみる保育者の専門性の探究』2013】と文部科学省の新規採用研修向けビデオ岩波保育ビデオシリーズ「3年間の保育記録①」逐語記録】²を用いて分析することとした。また、日々の保育の中で、子ども同士の感情のぶつかり合いから見る「カブト虫の匹数」の逐語記録を用い、文脈の中で「加減」と思われる行為と副詞（状態・状況等）の抽出を行い、遊びの行為と文脈から「加減」行為が自己の言語感覚に影響している可能性を分析することとした。

○分析方法は、次の通りである。

対 象 児 5歳児と3歳児の遊び場面での逐語記録

対 象 園 都内2園と岩波映画ビデオ

調査期間 2017年4月から2018年4月（一部資料2013年使用）

分析方法 逐語記録と映像をもとに、①媒介する遊び ②幼児の行動 ③（意識的）加減 ④（無意識的）加減 ⑤状態副詞や状況を表す言葉に分類し、特に副詞の言葉と行為行動との関係を総合的に読み解き幼児が加減するときに、言語感覚も同時に表現（外言・内言）されていることを分析する。分析者は、保育経験20年以上3名と、有識者3名で検討した。

Ⅲ 結果と考察

1. 普段の遊びでの身のこなしや、物を扱う時の情動について分析

結果〈事例1-1〉

5月 3歳児 5歳児 ビデオより分析を抜粋

5歳児が始めたヒーローごっこの様子を見て3歳児が関わってくる。3歳児の行動を受け入れながら、遊び方(戦い方)を知らせていく。「うそっこ、うそっこの戦い」「うそっこだからね」と言いながら、本気でやってきたことには、加減して強くやり返したり大きな声で踊ら驚かせたりしながら遊んでいる。

【加減の読み解き】

5歳児同士で遊んでいたときは、互いに力加減をしていた。しかし、3歳児は手加減をすることなく5歳児にとびかかってくる。そのことに対して、遊びとして受け入れながら、言葉で「うそっこだからね」と加減が必要なことを伝えている。また、言葉だけではなく押し返す、やり返すなどの行為を通して加減が必要なことを伝えていく。人との関わりの距離や関わり方について無意識から意識に変化させている。

遊びの中で自分の思いや相手の思いと交差する中で、身体的動作や情動・言葉を介して相手との距離やかかわりも加減している。遊びの中で、常に自己の感情が揺れ動いていることが分かる。

結果〈事例1-2〉

5月 5歳児 女児 ビデオより分析を抜粋

3月に種をまいたサヤインゲン収穫をした。昼にゆでて食べることになりN子とY子は、用務主事さんからスジの取り方を聞いてスジを取り始める。何回か繰り返す中で取り方の要領が分かってくる。「ここから、そーと取るんだよね」顔を見合わせながらじっくりとする。そして、真剣に手元を見ながらスジを取ることを続ける。

【加減の読み解き】

やり方はわかるが、どのくらいの力を入れたらうまくとれるのか、これまでの経験値がないことなので意識的に力の入れ方を加減している。繰り返して行ううちに、うまくできるようになり二人の会話が生じる。また、顔を見合わせて嬉しさの共有を確かめて再び続ける。ここでは、意識的な加減が見られるが、経験値が増してくると意識の度合いが変化し身体知として加減行為を幼児が獲得することが分かる。

結果〈事例1-3〉

10月 1歳児(満2歳児) 男児 ビデオより分析を抜粋
(手作り箱カートを引く)

K児、S児は、保育室のままごとコーナーと、対面にいる保育者(畳の上にテーブルを置いた遊びのスペース)を行き来して遊んでいる。K児が、ままごとコーナーに行き、箱カート2つにままごとのごちそうやエプロン、小ボトルなどを入れて両手で引いて歩きはじめる。S児も同じように2つの箱カートに様々なものを乗せてK児の後を追って歩き始める。K児、S児共に引いているカートの様子を振り返りながら保育者のもとへ向かっていく。

【加減の読み解き】

箱カートにものを乗せて遊んだ経験から、たくさんものに乗せたり速く走りすぎたりすると箱の中に載せたものが落ちてなくなってしまう経験をしている。2歳児なりに、乗せる量や走る（歩く）速さについて考えながら行動している。箱カートに入れる物の量の加減や物が箱の外に飛び出さないための歩きや走りのスピードの加減がされている。

【普段の遊びでの身のこなしや、物を扱う時の情動についての考察】

幼児が自己性を形成する際、遊びや生活で自分の思いや相手の思いと交差する中で、身体的動作や情動・言葉を介して常に自己の感情が揺れ動いていることが確認できる。一人で物を操作する際には、非加減行為を経て、加減行為に至ること、無意識的行為から生まれる加減操作が多く確認できる。つまり、子どもは、衝動的あるいは直感的判断による無意識な行動から注意深く思考的判断をもった意識的身体行為「加減」を操作し自己性を獲得していくことが明らかになった。そして、子どもが「加減」を繰り返し学ぶことで情動の加減を学び取り、加減を表現する言語が獲得される。

2. 子ども自身が、行為として動く「加減」が言葉の生成に、どのように影響しているかを明らかにする

A は意識的加減 **B** は無意識的加減

結果〈事例2-1〉

①媒介する遊び	0歳児と廊下を使ってトロッコで遊ぶ
②幼児の行動	<p>0歳児のS男が泣かない様子を確認しながら、ゆっくりとトロッコを押す。 S子 A 「ぜんぜん泣かない」 A子 A 「赤ちゃん乗せています」(小声で周囲に伝える)</p> <p>0歳児が揺れることを気にしながら、台車を止めようとしたが、Y男が止めようとした場所に立っていた。 A子 A 「ちょっと、Yちゃんここ邪魔」とY児に伝える。</p> <p>○映像状況 0歳児が驚かないよう声の大きさを調整している。相手がいやな思いをしないように伝え方を和らげている。トロッコを止めようとした場所に、Y児がいたので、優しい口調で伝えている。</p>
③意識的加減	<p>A 0歳児の様子を捉えながら、トロッコの押し方を加減 A 相手のことを意識して伝え方や表現の仕方を加減。</p>
⑤副詞的(状態)	ぜんぜん・ちょっと

考察2-1

5歳児のA子は、0歳のS児が大きな声で驚くことや、トロッコに乗ることで不安になっていることをこれまでの関わりの中から感じ取っていたので、自らの声を加減して小さくしたりトロッコのスピードをゆっくりにしたりしていると捉えることができる。トロッコのスピードについては、意識的にS児の様子を観察しながらスピードを加減している。

また、5歳児Y男がいやな気持ちにならないように意識的に「ちょっと」と言葉を加えて伝え方によっておこる印象を加減している。

〔A〕〔B〕ともに相手との関わりの中で、意識的に行われている行為であるが、相手との関係性については無意識から意識化され意識的な行為に移されていると考えられる。

結果〈事例2-2〉

①媒介する遊び	5歳児カブトムシの幼虫の匹数でのいざござ 00:00-00:24
②幼児の行動	S男「〔A〕 これもしなくしちゃったら、いやでしょうが」 K男「〔A〕 やだけどさ、7ひき」 S男「7匹じゃない」(〔A〕 指で指し示しながら、広げた土を指す。) S男「Sくんのは、8匹で、一匹死んだん だぞー」 K男「〔B〕 でも、Kくんのは7匹だよ」 T 「K男の顔を見ながら、K男に7匹いたことを確認しようとしている。」 「一匹もらおうとしたの。」 S男「これ、〔B〕 もし無くしちゃたら、いやでしょ」 K男「〔A〕 だけどさ、7匹」 S男「7匹じゃない」
③意識的加減	〔A〕 相手を気遣いながら、自分の思いを語り方を加減
④無意識的加減	〔B〕 自分の気持ちを伝えるために意識的に加減
⑤副詞的(状態)	だぞー・だけどさ

考察2-2

S男はK男と言動を交わしながら、幼児なりに冷静を維持して意識的または無意識的な心の「加減」操作を行う様子を読み取ることができる。これは、自己を形成していく過程が読み取ることができる。僅か24秒の中にも、その子と相手との関係に心配りながら、「言葉」を選択肢、言語感覚を形成していると言える。

結果〈事例2-3〉

①媒介する遊び	5歳児カブトムシの幼虫の匹数でのいざござ 00:25-01:37
②幼児の行動	S男「〔A〕 じゃ、さがしてごらんよ」(かなり冷静にTとK男に向かって話す。) K男「あげないでもいいんだよー」 K男「〔A〕 じゃしょうくんの幼虫、6びしかいないだから。〔B〕 同じことにしようよ」 S男「8びき 〔C〕 しか いない」 T 「ちょっと、ちょっと、ここには、8匹って書いてあるけれど、2匹しんじゃったでしょ」 (Tは、S男にわかるように、指で1.2.と示しながら、数を確認している。) T 「先生が見たのは、この前だけだけど、その前1匹しんじゃったでしょ」 S男「死んでいないよ、一匹だけ」(S男も指で「一匹だけ」と示しTに訴える) S男「6びきじゃない、〔B〕 そんなの しらないよ」

	<p>S男「その前に一匹死んだ [じゃない]」 (突然、興奮し出したS男に、Tは手をつかみ、引き寄せ、話を伝えようとする)</p> <p>S男「 [そんなの] しらないよ、嘘で言っている」 S男「嘘で言っている [じゃん]、嘘でいってる」 T 「K君がもう一匹あげるよって、いってくれたんだって」</p>
③意識的加減	[A] 相手に譲歩を促す加減
④無意識的加減	[B] 相手に否定するも、これ以上ことを荒立てたくないという心の加減
⑤副詞的(状態)	そんなの・そんなの・じゃない・じゃん

考察 2 - 3

ここでのやりとりの中では、副詞的言葉の活用が頻繁に繰り返され5歳児の言語感覚的が見られる。S男は、「そんなの」「じゃない」「じゃない」という言葉使い、相手の気持ちに寄り添おうとしている。無意識的に気遣う心の加減が働いていることが捉えられる。

結果〈事例 2 - 4〉

①媒介する遊び	5歳児カブトムシの幼虫の匹数でのいざござ 01:38-03:59
②幼児の行動	<p>F子「園長先生 ねーなにしてるの」 S男 [B]「 [そんなの] さいしょからいってないじゃないか」 K男 [A]「だからさ、秘密であげようとしたんだよ。」 ○映像状況 Sが興奮し、話を聞こうとしないので、TはS男の腕を取り引き寄せながら話をしようとする。振り切ろうとする。嘘で言っていると強い口調で、Tに訴える。</p> <p>S男「ひみつじゃない、[B] そんなの離せ」 S男「手一、離せ、はなしてー」 S男「* * * *だけ死んでもいいの」 T 「しょうくんそんなにおこっているから」 ○映像状況 Tは、しょう君の手を離す。</p> <p>S男 [A]「だったらさ、こっちの幼虫だって [さー]、これしか居なくていいの」 T 「しょう君がそんなに怒っているからお話できない」 S男 [A]「だったらさ、こっちの幼虫だってさ、これしかいないでいいのー」 T 「だったら、怒らないで、K君にちゃんと言って。」 K君「6匹しか・・・」 S男「今怒っているじゃん。」 S男「先生、これでいいの。それで先生はいいの」 K君 [A]「だからさ、[A]だからさ 6匹うちのクラスの・・・」 K君 [A]「だからさ、緑組に一匹あげようよ、一緒にさー一緒にさ」 K君 [A]「だからさー、緑組にいっぴきあげようよ」 T 「いらないなら、K君にちゃんと、いって。」「いるよちゃんと。」 T 「怒らないで言ってごらん」 S男「さっきは、優しそうじゃなかったー」</p>

	<p>S男 [A]「そうだけど、みてごらんよ、[A] こんなにつちいっぱい [A] だったんだよ。」</p> <p>S男「みんながやんなきゃいけなんんだよ。土は、」</p> <p>○映像状況 K男が、落ち着きを取り戻したように話すS男のとなりに移動する。</p> <p>S男「土は、やなくていいの、やなくて [A] いいの」</p> <p>T 「落ち着いて」</p>
③意識的加減	[A] 自分の感情をコントロールするための加減
④無意識的加減	[B] 自分の気持ちを伝えるための加減
⑤副詞的（状態）	そんなの・だからさ・さー ・ だったんだよ

考察 2 - 4

興奮するS男が、今までのやりとりの流れを受けて、冷静に話そうと、意識的加減「だったらさ」と加減し伝えている。これに対して、受け手のK男も「だからさ」と、意識的加減をしながら、争いを回避しようとしていることで、話し合いは、比較的冷静に話しが進んでいく。互いのぶつかり合いが、言語表現を「加減」していると考えられる。そのために、互いに「だったらさ」と「だからさ」を繰り返している。

結果〈事例 2 - 5〉

①媒介する遊び	5歳児カブトムシの幼虫の匹数でのいざござ 04:00 -06:27
②幼児の行動	<p>T 「Sくんね、こんちゅうさん一匹いらなくて、6匹でじゅうぶんだって」</p> <p>K男「 [A] いや、いるけど、はなしがさきなんでしょ」</p> <p>S男「 [A] そしたらね、いいよって言ってくれなければ（…不明…）言えないのー」</p> <p>K男「 [B] ちよっちよっと、まって」</p> <p>K男「ねー、みんなもぐっているよ」</p> <p>K男「 [B] えっ、ええええええー」</p> <p>S男「 [A] じゃ、おれがさがすよ」K男の方へ移動する。</p> <p>S男「 [ほら]、青組は、持って、 [ほら] 」</p> <p>K男「おれ7ひきだよ」</p> <p>S男「 [B] ええええええー」</p> <p>○映像状況 保育者と参加者の対話「うまく解決できたい」</p> <p>S男「ふたつあげていい」</p> <p>K男「S君の好きな幼虫選んでいいよ」</p> <p>K男「ハイ、これ、」</p> <p>S男「これ」（互いの昆虫を交換し合っている）</p>
③意識的加減	[A] 自分の気持ちを伝えるための加減 [B] 自分の感情をコントロールするための加減
④無意識的加減	話し合いの全体
⑤副詞的（状態）	ちよっちよっと ・ えっ、ええええええー ・ ほら

考察 2 - 5

K男が冷静になったことから、S男は無意識だが心を「加減」しながら、話し合っている状況を読み取ることができる。S男もK男も、副詞の創出よりも意識的加減の言葉が多くなっている。互いに気持ちの出し方を言葉や態度で加減している。

結果〈事例 2 - 6〉

①媒介する遊び	3歳児の片付けの場面
②幼児の行動	<p>保育者「さあ行こうよ。B子ちゃん」</p> <p>B子 A「<u>まあだ</u>」</p> <p>保育者「ミッキーさんのビデオ終わっちゃうよ…先生、ウサちゃんの紙芝居もあるんだけど」(B子が保育者の手を取る)</p> <p>B子 「ウサちゃん？」</p> <p>保育者「ウサちゃん。ウサちゃんの紙芝居 ウサちゃんの紙芝居」</p> <p>B子 「あのね、ウサちゃんないてるかもよ」</p> <p>保育者「泣いているかも？ じゃあ一緒に見に行こうよ。」</p> <p>B子 「ダメだ」</p> <p>保育者「ダメだ？」</p> <p>B子 B「<u>いまね、とけたら…</u>」</p> <p>保育者「それとけたら？とけそう？」</p> <p>B子 B「<u>まだとけてない</u> (土をバケツの中に入れる)」</p> <p>保育者「だって新しいの入れるんだもん。これもう新しいのはなしにしよう？ね。これほら、大事にとっところ？」(バケツを取ろうとする)</p>
③意識的加減	A 自分の気持ちを伝えるための加減
④無意識的加減	B 自分の感情をコントロールするための加減
⑤副詞的(状態)	まあだ いまね、とけたら まだとけてない

考察 2 - 6

「まあだ」と保育者と言葉を交わしながら、自分の気持ちのまだ遊びたい気持ちを意識的に伝えている。また、その後は保育者の様子をうかがいながら無意識的に加減して表現し自分の遊びたい気持ちを表現している。

【子ども自身が、行為として動く「加減」が言葉の生成に、どのように影響しているかを考察】

幼児期の言葉の発達過程において、遊び体験の中で交わされる行為「加減」である媒体を介して、内心的に起こる内言・外言化される身体知から見られる言語表現は、どのような、自己性の中で形成され、且つコミュニケーションによって育まれていくのかを明らかにすることが目的である。そのため、我々は、当初、「加減」を表現する言葉として、副詞(状態副詞・程度副詞・陳述副詞)などに着目し、分析を試みた結果、副詞の産出は認められるものの、一概にその行為と副詞の産出が同定できるとは限らない。

よって、映像で確認する、子どもの「加減」の行為と言語感覚は、その場面での子どもの、力関係・思い・表情・オノマトベなど・そのときの価値付け・言葉の強弱、動作などと、今

回の3つのカテゴリー（③ 意識的加減④ 無意識的加減⑤ 副詞的（状態））から、全体の文脈を考察することで、次のことが見えてくる。

1. 言語感覚は、感情のゆらぎによって、外言（オノマトペ等）として発せられ内言化する。
2. 内言化したことを相手の感情のゆらぎに併せて、『加減』が働き、外言化する。
3. 言葉は感情と一体的名物である以上、遊びという体験的な媒介は不可欠な行為であり、媒介を「人」も含めるとするならば幼児期の体験的学びは、大変重要である。
4. 遊びは、常にその子、もしくは、相手との間で、「加減」によって変容していくものでありその「加減」によって誘発される言葉が、子ども達の言語感覚を育てていると考えられる。
5. 感情の揺らぎは、身体知の「加減」によって、生み出されていることから、好奇心や興味・関心によって揺さぶられ、その都度、変化変容する、物、人、コト、場、時間、空間、素材、道具の精選が不可欠である。

IV 全体のまとめ

子どもの感情は、遊びを展開していく中で自分の思いや相手の思いによって常に自己の感情が揺さぶられる。揺さぶられる行為を生み出す環境として、遊びや生活がある。中でも子どもは、個と集団の中で、自己主張と自己抑制とのバランスをとり自己を調整しつつ自己性を形成していく。この自己性を、岩田は、行為の主体としての自己の認識によって形成されていくものであると述べている³。つまり、自己性は、子どもの行為の中にある主体的な自己の認識の判断と主張の深さによって形成されていくものと考えられる。今までの多くの研究は、子ども同士が関係する場面での互いの自己調整について「試行錯誤」「葛藤」「喧嘩」「いざこざ」「折り合い」と言った感情の動きを捉え、自己性の認識を分析している。そこで、我々は、こうした子ども同士が関係する場面「試行錯誤」「葛藤」「喧嘩」「いざこざ」「折り合い」といった、今までの表層部分ではなく、こうした行為を表出するに至るまでの過程となる深層的な自己性を形成する要因について、普段の遊びでの身のこなしや、物を扱う時の情動、そして、人との言葉のやりとりに視点を置き、何気なく行っている子どもの「行為」を分析することで、行為の深層で同時に形成される自己性の形成過程を探ることができる。

V 今後の研究の可能性について

子どもの感情は、遊びを展開していく中で自分の思いや相手の思いによって常に自己の感情が揺さぶられる。揺さぶられる行為を生み出す環境として遊びや生活がある。その中で、自己主張と自己抑制とのバランスをとり自己を調整し、自己性を形成していくわけだが、ここには子ども同士の関係と、保育者を介してという人的環境の関係がある。今までの研究においては子ども同士の遊びの中での加減行為であったが、そこに意図的・無意図的な保育者の言葉かけや援助が介入した時に子どもの加減行為は変化するのだろうか。

そうした子どもの行為を表出するに至るまでの過程となる深層的な自己性を形成する要因については、保育者の関りに起因するところもあるのではないかと考えられるのではないか。

このことを今回の研究と関連付けて探ることにより保育者の保育の質を高める側面の一面

になるのではないだろうか。

〈注〉

- 1 マイケル・ポランニー著、高橋勇夫訳『暗黙知の次元』筑摩書房、2017年、18、80、85、94頁。
- 2 「葛藤場面からみる保育者の専門性の探究」2013幼児教育研究部会:公益財団野間教育研究所紀要 第52集—第5章 PP.103-105、文部科学省新規採用研修向けビデオ・岩波保育ビデオシリーズ「3年間の保育記録①」逐語記録。
- 3 岩田純一『子どもの発達の理解から保育へ——〈個と共同性〉を育てるために』ミネルヴァ書房、2011年。